

# ARTA



AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

# 「確固たる一歩」

2018 ARTA DIGITAL Rd.5 FUJI500  
BE THE STEADFAST



真夏の富士ラウンドは今年から 500 マイル=800km という長丁場の戦いになった。  
5 スティントに及ぶレースは、これまで以上にチームの総合力が問われる戦いとなる。  
前戦タイで思わぬ躓きを犯してしまった ARTA にとっては、ここで踏ん張ることができるかどうか  
がチームとしての力であり、特に GT300 クラスの王座を目指す 55 号車 ARTA BMW M6 GT3 に  
ってはシーズンの大きな分かれ目になることは明らかだった。



AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

**ARTA**



AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

**ARTA**

まずは予選で2番グリッドを獲得し、フロントロウから富士の長い長いストレートへと加速していく。ステアリングを握る高木真一に、エグゼクティブアドバイザーの土屋圭市がアドバイスする。土屋「真一さあ、追い風が強いから後ろのクルマにスリップに入られたときに1コーナー気をつけてよ。インを締めちゃって」先頭をいく25号車 HOPPY 86 MC の後ろを走っているうちにややエンジンの温度が上昇してしまい、エンジニアの安藤博之から風を当てて冷却を促進するよう指示が飛ぶが、高木にはまだマージンがあった。



AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

ARTA



安藤「ストレートではクリーンエアで走ってクーリングしてください」

高木「はいよ〜」

土屋「真一、この周に勝負かけよう」

一気に攻勢を掛けた高木は 8 周目のメインストレートから 1 コーナーで 25 号車をパスし、首位に躍り出た。次にステアリングを握る ショーン・ウォーキンショウにアドバイスを送るほど高木は冷静だった。



AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

ARTA

土屋「これでエンジン冷えるよ、大丈夫だよ」

高木「最初はブレーキでリアが出やすいからションに言っておいて」

20周目を過ぎたあたりから少しずつリアタイヤのグリップ低下が進み、高木はエンジニアの安藤とタイヤ選択を相談し始める。



高木「立ち上がりで結構リアがツラくなってきてるね」

安藤「セカンドスティントに向けてタイヤはどうですか？」

高木「今のうちに1回ハードタイヤもありだと思うね」

安藤「前後ともハードですか？リアはミディアム？」

高木「前後ハード。リアはちょっとキツイからね」

土屋「39秒台で走ってるのは真一だけ。あとは40秒台後半から41秒台だよ」



AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

ARTA



30 周目まで引っ張ってピットインし、ショーンに交代。  
ハードタイヤを履いたショーンはずっと好ペースを維持して走り続け、  
このタイヤ選択は正解だったと言えた。



AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

**ARTA**

土屋「ション、ペースが良いな」

安藤「今君がコース上で最速だから、このペースをキープしてくれ」

SW「了解だよ」

土屋「タイヤはハードで当たりだな」

安藤「レオンが 40 秒台連発で来ているけど、君も良いペースだ。40 秒台をキープしてくれ」

SW「了解」

ただし高速コーナーではアンダーステア傾向で、ションとしては決して楽なドライビングではなかった。

それでも 66 周目まで後続を引き離しながらトップを走り続けた。

真夏の暑さに 500 マイルという過酷なレースで次第に脱落者が出ていく中で、55 号車のレースは順調そのものだった。



AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

ARTA





AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

**ARTA**



一方、GT500 クラスを戦う 8 号車 ARTA NSX-GT は、土曜朝の走り始めに思ったようなパフォーマンスを発揮することができなかったものの、午後の予選までにしっかりとセットアップを煮詰め直し、NSX 勢の中では最上位の 8 番グリッドを獲得した。スタートドライバーを務めた伊沢拓也は長いレースを見据えて冷静にクリーンなレースを進めていった。徐々にペースを上げていき、16 周目に 1 台、そして 23 周目にさらにもう 1 台抜いて 6 位にポジションを上げた。



AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

**ARTA**

星「良いペースで走れているから、これをキープしていこう。あと15周いく予定です」

伊沢「15周、了解、了解。タイヤはこのペースでなら走れる」

星「了解。だいたいトップと同じペースで走れているから、このペースをキープしていこう。

今ポジション6、前は1号車、後ろは17号車。前とのギャップは9.5秒、後ろは4秒」

もはやベテランの域に入りつつありマシンコントロールに長けた伊沢は、的確にマシンの状況を把握しエンジニアの星学文へと伝えてくる。



A close-up, low-angle shot of the front of a red race car. The car's body is the primary focus, featuring the word 'ARTA' in large, white, sans-serif capital letters. Above it, the word 'AUTOBACS' is written in smaller, white, sans-serif capital letters. A stylized logo, resembling a fan or a wing, is positioned above the 'AUTOBACS' text. The car is on a dark track, and the background is blurred, showing the structure of a racetrack under a blue sky.

**ARTA**

**AUTOBACS**



AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

**ARTA**



AUTOBACS

Sparky-Line

KENWOOD

BRIDGESTONE



AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

ARTA

伊沢「荷重が掛かっていないときのフロントが少し軽くなってきているかな。トラクションは問題ない。少しアンダーっぽくなっているところはあるけどリアは問題ないよ」  
28周目を過ぎたところで周りではピットインが始まり、ARTAも34周目に伊沢をピットへと呼び入れて野尻智紀にドライバーチェンジを行なった。



AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

**ARTA**



野尻は前後のマシンのペースとギャップを確認しながら、好ペースで走行していく。順位は6番手といえどもペースはトップと変わらず、トップとのギャップもほとんど変化していかない。

星「前は1号車、5秒先。後ろは17号車でギャップ5秒。ポジション6」

野尻「了解。平川（亮、1号車）は何秒？」

星「1分31秒9。その前の周は遅かったよ。トップとの差はちょっとずつ縮まっていた、18秒5。良いペースだよ」

星は最後のスティントでソフトタイヤを履いてプッシュすべく、各スティントを少しずつ引っ張って周回数のマージンを積み重ねていく。

73 周目に野尻はピットインして再び伊沢がコースへと戻り、6 位をキープしてレースを進めていった。

伊沢「(後ろの) 17 号車はどのくらいのペースで走ってる？」

星「2 秒 6、2 秒 9、2 秒 2。2 秒台でずっと走ってるね」

伊沢「ギャップはずっと同じ？」

星「そう、ギャップはずっと 8 秒のままだね。前とのギャップは 3 秒です。

セクター 1 は伊沢くんの方が早いし、最高速も速いよ」

伊沢「了解、頑張ります」

後ろにいる 17 号車がじわじわとペースを上げてギャップを縮めてきた。

ホンダ勢のトップを争う上でもここは負けられない。



AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

ARTA



星「後ろ 17 号車もプッシュし始めてギャップ 5.7 秒。後ろが 3 秒まで来てます」

伊沢「了解」

ここで対 17 号車を考え、星はレース戦略に修正を加えることにした。ここでは引っ張らずピットインを早めることにしたのだ。

星「17 号車はプッシュしてアンダーカット（先にピットインして新品タイヤでの逆転）を狙っているみたいだから、17 号車がピットインしたらウチもその次の周に入ります。あと 10 周くらい。とにかく前に着いていこう。頑張るって」

伊沢「了解、了解」

112 周目、17 号車がピットインしたのを見て伊沢もピットに入り、野尻にバトンタッチする。

この日 4 回目のステント。野尻にとってはこれが最後のステントになる。



AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

ARTA



AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

**ARTA**

この日4回目のスティント。野尻にとってはこれが最後のスティントになる。

星「前とのギャップ5秒、後ろとも5秒です」

126周目に前走車にトラブルが発生し、勞せずしてポジションは5位に上がった。

しかし野尻にも思わぬアクシデントが襲いかかってきた。

野尻「後ろから追突された！」

星「走れてる？」

野尻「XXX」

野尻からの返事はノイズも相まって聞き取ることができない。

星「次のストレートで確認するけど、今のところ走れてるね？」

野尻「真ん中を走るよ、あんまりインは走りたくないから」

星「OK、見た目的には大丈夫。」

野尻「了解」



AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

ARTA



Suprem  
Honda Racing  
Honda FORMULA DREAM PROJECT  
ART-PRO



AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

**ARTA**

最後まで順位が入れ替わるチャンスは訪れず、伊沢は4位でフィニッシュした。

星「お疲れ様でした、P4です。上出来です」

伊沢「17を抜いて表彰台を獲りたかったね……クルマの中がオイル臭いよ」

星「了解、大変だったね、ありがとう」

そうは言うものの、フリー走行からの挽回を考えれば、まさにチーム全体の力で掴み取ったポイントだった。

鈴木亜久里総監督もほっとした笑顔を見せた。

「土曜朝のセッションから考えると、かなりパフォーマンスが上がったね。スタッフとドライバーの頑張りに感謝したいよ。ペースが非常に良かったし、内容も良かった。敷いて言えばホンダ勢のトップでゴールしたかったけど、チームは非常に良い雰囲気だし、シーズン後半戦に向けて弾みがついたね」



AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

ARTA



AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

# ARTA



AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

**ARTA**



幸いにしてマシンに大きなダメージはなく、高木はその後も順調に走行を続けた。敢えてプッシュする必要がないほど、55号車は速かった。タイヤも充分すぎるほどにマネジメントできていた。全てが上手く行く時というのはこういうものだ。

高木「今まあペースを上げているけど、このままで良い？」

安藤「はい、このペースで良いですよ。今は高木さんだけ39秒台です」

高木「あと何周？ 少しずつリアが来はじめたよ」

安藤「最低あと5周はいきたいです」

高木「なに？ 5周だけで大丈夫なの？」

安藤「他車と較べるとまだ落ちてる感じはないので引っ張ります」

土屋「頼むよ、真一」

高木「はいはい〜。全然大丈夫。気をつけながら走りま〜す」



AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

**ARTA**

101 周目にショーンにバトンタッチし、こちらも順調に周回を重ねていく。

GT500 クラスのマシンに接触される場面あったが、こちらも大きなダメージはなかった。

高木の走り終えた第3スティントのタイヤを見た土屋がショーンに右フロントを労るよう指示する。

土屋「ショーンに右フロントを大事に使えって言って。」

安藤「フロントタイヤをマネージしてくれ。特に右フロントだ。2位とは40秒のギャップがある」

SW「了解、右フロントだね」

安藤「タイヤの状況はどう？」

SW「タイヤは良いよ。高速コーナーでは少しアンダーステアだけど、それ以外は問題ないよ」



AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

ARTA



Asper  
Autobacs

Autobacs

EDGE

Calm

BELOF

CAR MATE

PIAA

CCI

STONE

POTENZA  
BRIDGESTONE

ARTA  
BRIDGESTONE

WORK



AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

ARTA



131 周目には再び高木にスイッチして最後のステントへ。

後続との間には 40 秒以上の大きなギャップがある。あとはマシンをゴールまで運ぶだけで良かった。

安藤「後ろは 0 号車。ギャップは 48 秒」

高木「そう。じゃあちょっとペースを落とすかもしれない。ちょっとタイヤの内圧が低いな」

安藤「了解。残り 28 周です」

高木「安全にクルマを労りながらいきま〜す」

終盤には一瞬、雨粒が落ちてくる場面もあったが、これもすぐにやみ波乱をもたらすことはなかった。天候まで ARTA に味方してくれた。



AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

ARTA



AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

**ARTA**



終わってみれば 164 周を走ってライバルたちを全て周回遅れにし、  
55 号車は圧倒的な速さと強さで富士を完全制覇してみせた。

高木「やった〜！ ありがとう！ 完璧でした！ 本当にバランスの良いクルマでした」

安藤「高木さん、すごい良いペースでしたよ。ションも」

土屋「真一、ありがとう！ 本当にありがとうね！ やったな、真一！」

高木「みんなありがとう〜！」

土屋「お疲れ様。疲れたろ？」

高木「おっさんには疲れましたが、クルマがすごく言うことを聞いてくれたんで、楽しさせてもらいました」

土屋「真一が作ったクルマだよ、ありがとうね」



AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

ARTA

これで高木とショーンは2位に6ポイント差を付けてランキングトップに立った。シーズンは残り3戦、ついにチャンピオン争いの主役に躍り出たのだ。土屋は言う。「ここで勝つことを目標にみんなで力を合わせてやってきたんです。なかなかそういうのは実現できるものじゃないけど、ここまで上手くいくとは思いませんでした。トラブルも出ないクルマを仕上げてくれたチームに感謝です」



AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

ARTA  
PROSTAFF



BRIDGESTONE

Gruppe M Racing

Fireflex

Pioneer  
COMTEC  
anac

Citroën

ARTA

Pioneer  
COMTEC  
anac

TOEI  
KENSU

BU

BRIDGESTONE

AUTOBACS

ARTA



AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

ARTA



NISSAN

LA

SIMO<sup>®</sup>  
MULATOR

TORAY  
Toray Carbon Magic

RU

Audi

DUNLOP

Holts  
Castrol  
EDGE  
PRO STAFF

JM

BRIDGE

Super  
AUTOBACS



AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

ARTA

SUPER  
AUTOBACS

こうして8号車、55号車ともにタイヤでの躓きは完全に払拭し、しっかりと次の一歩を踏み出してみせた。富士500マイルというシーズンで最も過酷なレースでこの結果を出せたことが、チームとして何よりも大きな収穫になった。これは会心の一撃ではなく、常にこんなレースができるという、確固たる一歩だ。今年のARTAは強い。シーズン後半戦はもっと力強いARTAが見られるはずだ。



AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

**ARTA**



AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

**ARTA**



**AUTOBACS**

**ARTA**

**AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI**



**AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI**

**ARTA**



# COMTEC

<http://www.e-comtec.co.jp/>



AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

# ARTAOE



株式会社オートバックスセブン

# ARTA

THE "BIG RACE" FOR SUZUKI AGURI STARTED IN 1998  
AS HIS VISION FOR THE FUTURE. OVER THE YEARS, IT HAS EVOLVED  
THROUGH THE TOUGHNESS AND WILL OF ARTA. IN THAT SPIRIT,  
ARTA IS RACING TO INSPIRE THE FUTURE OF MOTORSPORTS.



ARTA Project



ARTA DIGITAL You tube チャンネル

To Be continued next race...

**ZERO** BORDER  
Team ZEROBORDER

©2018 ZEROBORDER INC. All rights reserved. No reproduction or republication

Director and Photographer : Masakazu MIYATA

Text : Mineoki Yoneya

Design : Hiroaki KATAYAMA

Special Thanks : AUTOBACS SEVEN CO., LTD / Miyuki SEO